

長谷川 望牧師

- * 「ユダヤ人の過越の祭りが近づき、イエスはエルサレムに上られた。そして、宮の中に、牛や羊や鳩を売る者たちと両替人たちがすわっているのをご覧になり、細なわでむちを作って、羊も牛もみな、宮から追い出し、両替人の金を散らし、その台を倒し、また、鳩を売る者に言われた。『それをここから持って行け。わたしの父の家を商売の家としてはならない。』弟子たちは、『あなたの家を思う熱心がわたしを食い尽くす』と書いてあるのを思い起こした。（ヨハネ2：12～17）「宮きよめ」と呼ばれるイエスの珍しい行動。その怒りの矛先はいけにえの動物を売る商人に対して、また、商売に必要な両替人に対してであった。動物をささげるとは律法で決められていたことであったが、そこでは暴利をむさぼったり、不正が行われていたようだ。また、エルサレムにはイスラエルのみならず、世界の各地からユダヤ人が来ていたので、ローマの貨幣をイスラエルの通貨に替える必要があった。そのための両替商も高い手数料をつけていたと考えられる。神殿に来ている人たちも、本来礼拝のために来ているはずなのに、礼拝は形式化、形骸化していて、中身の無いものになっていた。
- * 他の3福音書には、神殿は「商売の家」ではなく、本来は「祈りの家」でなくてはならないと書かれている。聖い敬虔な場所であるべきはずが、「強盗の巣」になっていると指摘されている。今日の教会もその目的と本質は「祈りの家」である。一人ででも、何人かが集まる時でも、大勢で礼拝をささげるときでもそれは神様と向き合う祈りの場所であることを覚えたい。
- * ユダヤ人たちは、イエスが神殿を「父の家」と呼んで、自らを神の子としていること、また、神を冒瀆するような行為を見て、もしもあなたがメシヤ、キリストである証拠をみせてくれるなら納得するだろう、と言う。「イエスは彼らに答えて言われた。『この神殿をこわしてみなさい。わたしは、三日でそれを建てよう。』そこで、ユダヤ人たちは言った。『この神殿は建てるのに四十六年かかりました。あなたはそれを、三日で建てるのですか。』しかし、イエスはご自分のからだの神殿のことを言われたのである。」（ヨハネ2：19～21）イエスは十字架にかかって死ぬが、三日目によみがえることを預言されたのである。しかし、彼らは理解することができず、本気でイエスを殺そうとするようになる。イエスは父のご計画どおり、十字架への道を歩まれる。